町並みかわら版

第九十号
柳井市白壁の町並みを守る会
事務局（皿田治）
℡ 090－1012－4204

第二十二回　商都柳井おひなさま巡り開催

今年もやって来ました二十二回目を迎える白壁の町の伝統行事。期間は二月四日から三月三十日まで。二月三日に町並み資料館に集まって来たのはいつものシルバー軍団。後期高齢者オーバー二名プラスそれに限りなく近い五名の男女計七名の面々。おっと。お待ちください。強力な助っ人が柳井商工会議所から一名派遣されて来ました。

早速倉庫からおひなさま七段飾り一式を六セット運び出す作業からスタート。これがなかなか大変な作業なんです。なにしろ金属製で出来ている雛壇の足場が重いのなんの。始めた当初はなんてこと無かったのに寄る年波には勝てません。助っ人に来てもらってあ～よかった。運び出しが終わると第二の障害が。雛壇の組み立てです。

一応組み立て易いように担当が決まっているのですが昨日食べたものが何だったかさっぱり思い出せないアラ古希世代が中心の我ら七銃士。四苦八苦で組み立てたと思ったら最大の難関が待ち構えているのでした。

三人官女、五人囃子に持たせる道具類、楽器がどうだったか全然思い出せない。「こりゃ～太鼓を持たせるんじゃったかいの～」「写真があるけ～見りゃ～え～じゃ」「ちいそ～て、よ～見えんのじゃ。見てくれんかの～」すったもんだの末ようやく完成したのでありました。

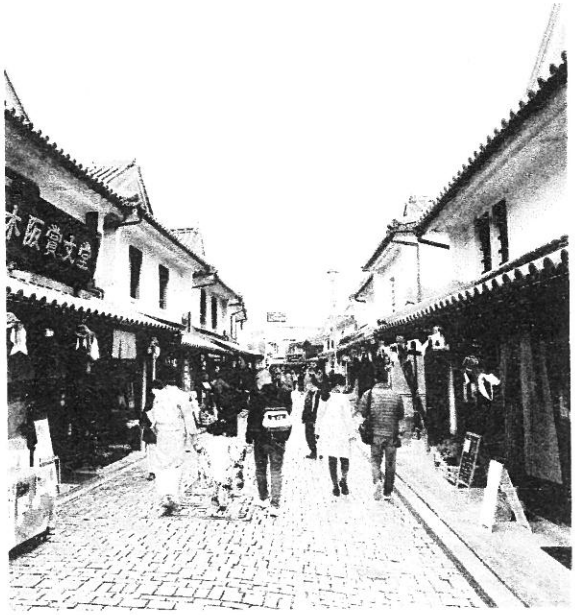
三年振りに開催が決定した花香遊。雛壇が壊れて修理不能などの理由で二カ所が不参加となったものの初参加の「やない書店」さんが加わり二十三カ所でウオークラリーを復活。

三月二十日尾林呉服店駐車場に集合したお馴染みの面々。今年はテントの設営・撤去およびウオークラリー受付運営をボランティアの高校生に手伝ってもらったお蔭で大変助かりました。

ラリーのエントリー用紙を五百枚用意。残った枚数から逆算して三百六十人以上の人が参加したものと推計。花香遊の来客数主催者発表が二千名らしいので結構人気の出し物だったんだと我田引水。

今年は過去に比べてコロナの影響か外国人の姿が激減。ラリーに参加した米軍岩国基地からやって来たカップル。時間をかけて二十三カ所すべてのスタンプを集めて来てくれたのはとてもうれしかった。

ボランティアで参加していただいた柳井高校と柳井商工と柳井学園の三十二名の生徒の皆さんありがとうございました。



“赤べこ”と“金魚ちょうちん”

白壁の街並みを守る会会長　木阪泰之

近年、“やない白壁花香遊”の“十三参り（じゅうさんまいり）”でもクローズアップされてきている柳井市の湘江庵。

十三参りとは、数え年で13歳（満年齢で12歳）になった男の子と女の子が健康に育ったことを祝う伝統行事です。

十三参りは13祝いとも呼ばれ、発祥地の京都を中心に関西で行われていましたが、近年では関西以外にも広がり、東京でも十三参りが行われています。

十三参りでは、13番目の菩薩様とされる虚空蔵菩薩（こくうぞうぼさつ）にお参りをして福徳と智恵を授かります。その歴史は古く、平安時代から始まったとされています。

清和天皇が13歳のとき、京都の嵐山にある法輪寺で成人の儀を行ったことが由来と言われています。

そこから、13歳に虚空蔵菩薩にお参りして知恵を授かるという風習が生まれました。また数え年の13歳は、生まれて初めて干支が一周し厄年となるタイミングでもあります。

このように、13歳まで健康に育ったことへのお祝いと知恵を授かることができるようにというお祈りが込められた記念行事が十三参りです。

柳井の湘江庵にも虚空蔵菩薩が安置されており、日本三大虚空蔵菩薩のひとつとされています。敷地内の案内板によれば、残りの2つは、宮城県登米市と、福島県柳津町とのこと。

この3つには共通点があります。それは、いずれも地名が「やないづ」であることです。何かしら意味がありそうな気がします。タイトルにも付けましたが、福島県柳津町は赤べこ発祥の地とされており、金魚ちょうちんの赤と相まって何だかご縁を感じるのは私だけでしょうか。今後、何かのきっかけで両地の親交が始まることもあるかも・・・しれませんね。

白壁の町並み通信環境アンケート結果のご報告

柳井市議会議員　下村　太郎

本年2月に柳井白壁の町並みを守る会の皆様を中心に、白壁の町並みの通信環境に関するアンケートのご依頼をさせて頂きました。お忙しい中ご協力を頂きまして誠にありがとうございます。

また、本アンケートの実施にあたりましてご尽力を賜りました木阪会長、事務局皿田様をはじめ会の皆様に深く感謝申し上げます。

まず、本アンケートの趣旨につきまして、改めて時系列を追ってご説明させて頂きます。

私自身、数年前より白壁通りにおける携帯電話の通信環境について、不安を感じておりました。携帯電話が繋がらなかったり、メールの送受信ができないことがあったりしたからでございます。

白壁の町並みは柳井市の宝ともいえる財産であり、貴重な観光資源です。その場所の通信環境が不安定であることは決して望ましいことではないと思っておりました。そのような中、白壁通りで事業を営まれている複数の事業主様より、通信環境が悪くお客様のスマホ決済ができない事象が生じるなど、事業上の不都合がある旨のお話をお聞きしました。

通信環境の整備については、一義的には民間の話（個人や事業主とドコモなどの通信事業者とのやりとり）でございます。そのため課題を感じられた事業主様は既に通信事業者様にご相談され、一定の対策をとって頂いておりました。それでも大きな改善は実現していない状況であり、更なる改善を望むには、白壁通り全体の問題として通信事業者様にご認識をして頂くことも重要と思い、本アンケートの実施に至った次第です。

なお、柳井市の商工観光課や総合政策企画課に問い合わせをさせて頂いたところ、通信環境整備については、重要伝統的建造物群保存地区であるが故の行政上の制約はないとのことでした。

どの程度状況が改善するかは分かりませんが、具体的な本アンケートの結果を通信事業者様に提示をすることで、何らかの前進を望みたいと思っております。

本アンケートの結果概要は左記の通りです。

白壁の街並み通信アンケート概要（2022/2/8～2/16実施）

回答総数：21（1回答で複数キャリアについての回答あり）

	質問事項（日頃生じている事象として）	合計 あり		合計 なし	
1	携帯電話の電波が繋がらない	8	35%	15	65%
2	携帯電話で通話する際に突然通話が切れる	5	25%	15	75%
3	LINEを使用した電話の使用ができない	2	13%	14	88%
4	LINEを使用した電話で通話する際に突然通話が切れる	2	13%	14	88%
5	LINEやメールなどのデータ通信ができない	3	18%	14	82%
6	PayPayなどの電子決済ができない	4	31%	9	69%

柳井の地図絵図

岸田稔明

第三十三回　柳井町市街図（大正十五年）その５（山口県文書館蔵）

第二十九回から、大正十五（一九二六）年に柳井町役場が発行した『柳井町市街図』を紹介しているが、今回は柳井港周辺を詳しくみていく。

今回掲載している地図の範囲には、西から「三本松」、「江ノ浦」、「岸ノ下」の地名が記されている。また、「新設停車場」と「埋立」の文字が手書きで加えられている。

柳井港（岸ノ下港）は、明治十七（一八八四）年に近藤唯治が私財を投入してつくられた。これにより、瀬戸内海の汽船の寄港地にすることに成功した。港は通称「ぬしや港」「ぬしや波止」ともいわれていた。

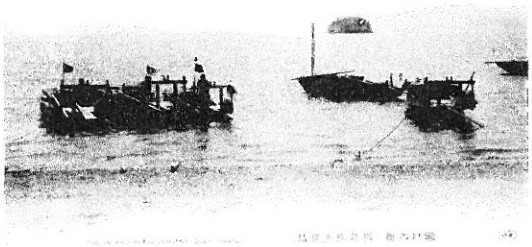
柳井港築造の十三年後の明治三十（一八九七）年、山陽鉄道（現：山陽本線）の広島～徳山間が開通した。開通と同時に大畠駅と柳井津駅（現：柳井駅）が開業したが、柳井港駅はなかった。

明治三十八（一九〇五）年以前は、柳井港は「柳井村」、柳井津駅は「古開作村」に属していたが、合併してからはどちらも「柳井町」に属していた。

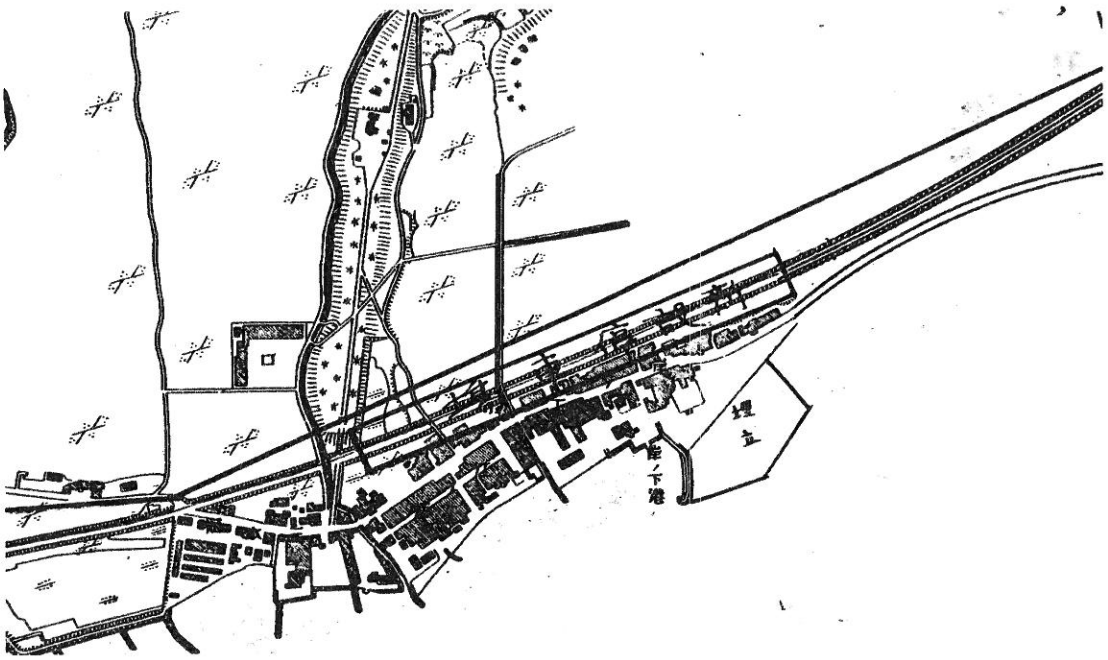
この地図が作成された翌年の昭和二（一九二七）年、駅誘致のため「柳井港駅建設期成会」ができた。ただ、当時は、一つの町に複数の駅ができることは通常あり得ないことだった。

当時、関門海峡に鉄道は開通していなかったため、下関～門司間を船で乗り継ぎ、九州の大分までは鉄道で約十二時間かかっていた。一方、柳井港から大分までは船で約四時間であり、「柳井港駅建設期成会」では、柳井港駅をつくることにより、国民の時間と経費の縮小に役立つと訴えた。また、田中義一内閣総理大臣（当時）を春日神社の丘へ連れて行き、駅の実現を訴えた。

その結果、昭和四（一九二九）年四月二十日に柳井港駅の開業が実現し、四国・九州の連絡が一段と便利になった。駅の敷地九十九アールの確保や駅の工事費は、地元の寄附により賄った。同日、柳井津駅は柳井駅へ改称された。



柳井港の東側は砂浜で、現在の国道一八八号から裸島を撮影した絵葉書も残されている（写真参照）。その砂浜も、大正後期から昭和の初めにかけて一部が埋め立てられ、昭和五（一九三〇）年には、桟橋をつくるなどの大規模改造が実施された。こうして、県東部の海の玄関口としての地位を確立したのである。



【柳井町市街図（柳井町役場発行、山口県文書館蔵）】

商都柳井の歴史　その二十

柳井津の経済発展（九）

豪商に向かっての努力

松島幸夫

前回は、寛保2年（1742）に古開作の皿田亦吉が、9歳にして柳井津の豪商である貞屋へ奉公に出たことまでを紹介しました。何度も言いますが、苦難があってこそ繁栄がもたらされます。皿田家の苦難を紐解いて、我々みんなの人生訓としましょう。桜花の美を誰もが愛でますが、冬の寒さがあってこそ開花することを忘れてはならないのです。

亦吉は、20年間奉公を勤めあげました。したがって29歳になっていました。父の名を継いで治兵衛（2代目）と名乗り、独立して商売を始めます。樋ノ上の土手に店を構え、貞屋の屋号をつけました。奉公先であった貞屋の屋号をそのまま使っていますから、のれん分けに準じた扱いだったのでしょう。父の商売は上手くいきませんでしたが、子は奉公の経験を生かして、巧みに新規参入を果たしました。とは言え、既存店の迷惑にならぬように、隙間を狙っての商売でした。平郡島などの辺地へ行き、茶・煙草・鬢付け油などを背負って売り歩きました。帰りには麦や胡麻などを仕入れ、自宅で販売しました。30歳で嫁を娶り、やがて子どもを授かります。小さな店ながら、順調な経営ができました。

皿田家の貞屋だけでなく樋ノ上土手の各商店が繁盛し始めたものですから、柳井津町の商人たちから代官所へ、樋ノ上土手での商売を制限するように願いが出されました。一方で樋ノ上土手の商人たちからも、現状承認の願いが出されました。結果、代官所は、樋ノ上土手での商売を餅屋と豆腐屋に限る、との通達を出します。藩が、村での商業発展を望んでおらず、錦見町・久賀町・柳井津町だけに商業を認めていたからです。

さあたいへん。様々な商品を扱っていた皿田家貞屋は、商売差し止めとなったのです。思案のあげく、柳井津町に移って商売を続けることにします。古市の片野屋の借家を借りて店を開きました。扱かった商品は、穀物を主に木綿類を加えました。家族みんなが一致団結して商売に励みました。辛抱の甲斐あって、借家を買い取ることができました。商売を軌道に乗せた2代目治兵衛（亦吉）は、77歳で老死します。新興の貞屋が、柳井津町に根を張った2代目治兵衛の功績は、たいへん大きなものでした。

2代目治兵衛（亦吉）には、千蔵と名付けられた才知に長けた男の子が生まれました。四男だったので、家から出なければなりません。25歳になった千蔵は寛政元年（1789）に、分家を立てて独立します。古市に屋敷を構える現在の皿田家の誕生です。屋号を「貞千」とし、木綿を扱いました。伊予（愛媛県）や豊後（大分県）で綿花を仕入れ、柳井津近郷の農家に機織りをさせ、反物を消費地に運んで売り捌きました。柳井縞は品質が良く、高値で売れました。蓄財ができたので、酒の醸造も始めます。文化13年（1816）には酒造株を買い取り、屋敷裏の稲田を購入して酒造蔵や醸造場を整備します。「壽」と名付けた酒の売れ行きが良好で、木綿業を縮小し、酒造業を収入の主体に替えました。岩国藩に多額の献金をしたのでしょう。藩から正式に酒造業者として認定されます。そして代官所が保管している年貢米から千石を、酒米として買い取ることが許可され、大量生産体制が整いました

旭寿の樽を抱える第36代横綱　羽黒山

資料館便り

『和みのひととき「花香遊」』

岸永　啓子

先の見えないコロナ禍の中で、ふっと心休まる「花香遊」が三年ぶりに開催されました。二千人近くの方々が着物姿や家族連れでゆっくりと楽しまれました。

三月のテレビ報道で柳井が紹介されたこともあり、金魚ちょうちんをより身近に感じて頂けたことでしょう。各会場、検温・消毒・マスク着用を徹底して例年通りの投扇興・おひなさま巡りスタンプラリー・柳井中学校生徒作品展・十三参り・松島先生の特別講演が行われました。町並み資料館では、初のクラシックコンサートが開かれ、柳井縞の着物姿のソプラノ歌手の佃春佳さんとピアニストの高山律子さんが素晴らしい演奏で観客を魅了しくださいました。

白壁通りに面して、毎年お雛様を飾り、スタンプラリーにご協力くださる皆様ありがとうございます。会場準備、人員整理、片付けにお手伝い頂いた高校生の皆さんありがとうございました。

コロナ禍の中、政府の指針によって来館者の人数や出身地が大きく変わってくるようです。厳しい時は柳井市内や近辺から、ゆるむと九州から大阪まで広範囲から。ネットで知って来てみてとても良かった、という声が多く聞かれます。コロナが収まって、広い地域から多くの方々を迎えて、賑やかな白壁の町並みが早く戻ってくることを祈るばかりです。

館内の「お鐘金魚」は十周年を迎え益々の人気を博しています。「ここで願掛けして願いが成就したのでお礼に来ました」とわざわざ来てくださる方も増えて嬉しい限りです。

二階の「松島詩子記念会館」は今一つ人気薄なので、もっと多くの人に親しんで頂けるように工夫していこうと思っています。

この一年の来館者数を見てみますと、月平均七～八百人、曜日別では土・日が各三十%、火・水・金が各十三%でした。

八月に「金魚ちょうちん祭り」が再開できますようにとお鐘金魚に願掛けをして、来館者の皆様に案内を続けていこうと思います。

【編集後記】

★世界中で異常な事態が続いています。感染症の流行や他国への一方的な軍事侵攻など約一世紀前の第一次世界大戦前夜の状況と酷似しています。人類が核を手に入れてしまった今は戦争の更なる拡大をなんとしても防がなければなりません。人類は愚かな選択を選ぶはずはない。人類の英知が発揮されることを信じましょう。

★白壁の町並みにおける通信環境について下村太郎さんより特別寄稿をいただきました。確かに以前よりかかって来た携帯電話の相手の声は聞こえるのに、こちらの声が相手に届いていない事態を何度か経験していました。結果によると確かに通信環境に問題がある回答が複数例あり、改善に向かってなんらかの進展があることを望みたいと思います。

（事務局　皿田）

令和３年度第４四半期
柳井市町並み資料館入館者数

	令和4年/1月～3月	令和4年4月現在累計
町並み資料館	2,269	296,429
	前年同期比　83.5%	
松島詩子記念館	618	108,638
	前年同期比　96.5%	